# アメリカ日記（中）

丸　田　明　生

## 5．アメリカ南部へ

7月27日 MSU の夏学期が終わり，これでこの大学での正規の講義は秋まで行われないことになる。この日我々11人のためにインターナショナル・センターは closing ceremony を催してくれさきにも一寸触れたようにCertificateとMSUの時計台を中心にしたスケッチを贈ってくれ，パーティをひらいてくれた。再三云うようだが，何と行届いた配慮であろうか。式場に当てられた部屋には「誠」という日本文字の額が飾られている。アメリカだって日本の文化や精神を理解しようとしているのではないだろうか，単なる物珍らしさのためばかりではあるまい。そう思いながら感謝の言葉のやりとりの中にワインをすすり，アメリカ料理に舌鼓を打った。そしてこれで約1ヶ月間共にアメリカの大学生活を同じ寮で過した仲間ともお別れとなる。各自はそれぞれの研究のためにある者はボストンへ，ある者は英国へ，又ある者はカナダロッキーへと目指して旅立っていく。そして私は——。私はいよいよ待ちに待ったFaulkner Conference（フォークナー会議）へ出かけるのだ。ノーベル賞作家 William Faulkner は1897年，ミシシッピー州ニューオールバニーに生まれ，一時期この故郷を離れたことはあるが，一生涯の殆んどすべてを

生誕の地に近いミシシッピー大学の所在地 Oxford で過した。その点ではまさに同時代の作家 Hemingway とは全く対照的である。Hemingway 程早く世間に認められなかったが，Faulkner の作品の中にはアメリカの歴史がある。人種問題を中心に置いた人間の苦悩の歴史がある。彼の全作品は一つの絵巻物のようにアメリカの南部を展開してみせるのだ。アメリカ人もようやく，いわゆるフロンティアめがけての進め！進め！の時代や思考から自分達の過去に目を向け，自己とは何か，それ故に自己は何をなすべきか，を考える方向にむかいつつあるのではないか。最近の「ルーツ」の人気もそれを物語っているのではないか。その意味で過去を語ることによって未来を語ろうとした Faulkner の作品が最近とみに関心を寄せられ始めたのも蓋し当然といえるであろう。

さていよいよ7月30日は，ミシシッピーに向かって旅立つ日だ。行きは空路，帰りは陸路の予定である。朝8時過ぎ，大学の寮から空港にタクシーをとばし，売店で新聞を一部買うと，その売店の若い娘がこちらに微笑みかけているようだ。少々いい気になって話しかけてみてその理由がわかっていささか失望。彼女は私が誰もわからないだろうと思って一人言にしゃべっていた日本語のいくらかの部分をキャッチしたのだ。それもその筈，アメリカン・フィールド・サービス交換留学生として高校時代に一年間千葉県で過したそうだ。「ニホンゴ，ミンナワスレチャッタ」という言葉，どうしてどうして大したものだった。今は大学生でこの売店で夏の間アルバイトをしているのだそうである。

East Lancing から Mississippi 州 Oxford まで行くには航空機を二回乗換えなければならない。1回目はシカゴで，そして2回目はメンフィスで。East Lancing から Chicago までは1時間あまり。席は夏ということもあって殆んど満席。空からみたミシガン湖の湖岸の曲線は美しく，緑の陸と藍の湖水との対照を際立たせていた。シカゴ国際空港で昼食をとることにしていたが，この空港は想像していたよりも大きく，国際線，国内線の発着が頻繁で，人の波でごったがえし，それにかなり重い荷物も持っていたのでいささか苦労した。ようやく構内のレストランをみつ

けたもの，満員に近く，その上セルフサービスである。次の航空機のdeparture gateを一応たしかめた上でのことなどで，ようやく料理をテーブルの上に置くところまでごぎつけた時にはホッとした気分で，その味が予想以上だったのはそれまでの疲れをいやしてくれた。シカゴには帰りの途中，Hemingwayの生家を訪れる目的などで又立寄ることを考えながら，午後1時30分，Memphisに向かって又空に飛上ったのである。

天気は極めて良く，8,000米の上空からみるアメリカ大陸は東西南北に無限に広がり，起伏のない緑の大地を道路が真直ぐにどこまでも延びている。眼下に雲が真綿のように点在し，時々視界をさまたげるかと思うと，一点の雲もない瞬間も出現する。機内では食事が配られている。飛行時間2時間あまりなのに食事が出るとは——これにはまいった。今シカゴで腹ごしらえをしたばかりだ。ほかの乗客はそのことをよく知っているのか食欲旺盛のようだ。飛行機を予約する時に，これらのことは確認しておくべきだった。それともチケットをよく読むべきだったのか。

メンフィスで1時間以上の待時間があった。かっては綿花の集積地として栄えた所と聞いているが，飛行場からは町の様子はみえない。空港の建物は立派で，近代的だ。さすが南へやってきたのか，シカゴ空港程の混雑はない。広々としたゲートの待合所で明日から始まるConferenceがどんなものなのか，Faulknerの作品の舞台となっているYoknapatawpha Countyとはどんなところか，などと考えてみる。やがて時間となり，最後の飛行機がやってきた。ここからオックスフォードまで約30分の短い旅だ。そしてそれにふさわしく，機も小型で，しかもなつかしいプロペラ機だった。オックスフォードはかなりの田舎と聞いていたが，飛行機が比較的低空を飛ぶということもあって，今度は起伏のある岡や谷や，木立の一本一本がはっきりみえる。このあたりはメンフィスに来るまでと違って人家が殆んどみえない。小さな湖や，その中の枯木までが鄙びた風情をそえる。と間もなく機は，林の中に滑走路があるといった感じの飛行場に着く。旅客機は外には見当らないが，個人用の小型機が数台あちこちに散在している。これがいわゆる深南部というところか，

といったような感慨がこみあげてくる。ミシシッピー大学はこの便でやってくる会議参加者のためにスクールバスをちゃんとさし向けている。ものの15分ばかりで大学の寮に着いた。しかしこのバスのドライバーの英語には全く閉口した。さっぱりわからない。これが世にいう南部英語なのか。南部の人がみんなこんな英語を話すのなら全くお手あげだ，と思ったのだが，これ程のなまりのある人にはそれ以後お目にかからなかった。彼は少し特別な人物だったのだろう。南部人でもちゃんと高校以上を出ていればこちらと話す時には標準英語を話すよう必掛けてくれているようだった。

## 6．Faulkner Conference

Faulkner Conference は，ここ数年つづいて開催されている。期間は一週間で，1977年度の場合は７月31日から８月６日までとなっていた。主催は *The University of Mississippi, Department of English* で，そのプログラム・パンフレットには次のように書かれている。

> A week in the land that Faulkner made legend offers readers, students, and teachers of Faulkner an opportunity to learn more about his work and to explore his home country. Lectures, discussions, panels, readings, films, slides, and tours will feature outstanding Faulknerian scholars, critics, and teachers.

それは一流のフォークー学者から学生にいたるまでのあらゆるバラエティに富んだ人々が一堂に会しておこなう学問の祭典ともいうべきものであった。そしてその実，126人という Faulknerian がアメリカのみならず日本からもヨーロッパからも集ってきた。日本からは私の外に３人，その中には既に一年間この大学で Faulkner 研究に従事していた室蘭工大の谷村氏もいた。会議は一週間盛沢山のプログラムに満ちていて，朝の９時から夜の10時近くまで全く興味と充実の連続であった。今ここでそのうちの２日間の日程を紹介してみよう。それは次の如くである。

THE UNIVERSITY OF MISSISSIPPI *presents*

# Faulkner and Yoknapatawpha

*A Week in the Land That Faulkner Made Legend*

「フォークナー会議」のプログラムの表紙

| | |
|---|---|
| TUESDAY, AUGUST 2 | |
| 9：00 | GUIDED TOUR OF OXFORD AND LAFAYETTE COUNTY |
| 8：00 | SEX AND HISTORY IN FAULKNER Lewis Simpson |
| WEDNESDAY, AUGUST 3 | |
| 9：00 | FAULKNER AND INNOVATOR Albert J. Guerald |
| 10：30 | DISCUSSIONS FOR SMALL GROUPS FREE AFTERNOON |
| 4：30 | WALK THROUGH BAILEY'S WOODS |
| 5：30 | PICNIC AT ROWAN OAK |
| 8：00 | WILLIAM FALKNER AND SHERWOOD ANDERSON James B. Meriwether |

Daily Schduleは一週間を通しておおよそ午前中は著名な学者や評論家の講演，午後はそれぞれのテーマに別れてのパネル・ディスカッション，そして夜は講演か，映画又はスライドの上映といったものだが，左表のように8月2日は殆んど1日，Faulkner自身や彼の作品にゆかりの土地へのツアーがおこなわれ，8月3日は大学に集合してから彼の生前の屋敷Rowan Oakへの森を通り抜けてのピクニックという具合に興味深々たるスケジュールである。先ずこの表にしたがって話を進めていくことにしよう。

9時にやってきた3台のチャーターバスに乗った我々一行はいよいよヨクナパトウファ・カウンティと呼ばれているフォークナー伝説の地をたずねることになった。この一週間の会議の期間中雨に見舞われる日は一日とてなく，この日もすばらしい快晴であった。南部のこと，さぞかし暑いだろうと想像していたが，思いの外さわやかで，むしろミシガンより凌ぎよい位であった。バスは先ずフォークナーが初恋の女性ではあるが一度結婚した前歴をもつ年上のエステルと結婚した教会に着く。典型的な地方の教会のスタイルだが，森に囲まれた中に清楚なたたずまい

をみせている。内部はガランとして牧師の姿も見えない。教会の前にはくずれそうな土産物店があり，ほの暗い内部ではその土地の民芸品などを売っている。フォークナーを慕って人々がここを訪れることの証左であろうか。やがてそこを出発した我々は左右に美しい松林のつづく赤土の道路をフォークナー農場へと向かった。このあたりの松は日本の松に非常によく似たもので，ただ幹がどれも真直ぐに伸びているのが違っているだけのようだった。アメリカの道路で舗装されていないところを車で通ったということも又珍しい語り草になるかも知れない。このフォークナー農場は *The Unvanquished* が映画にうれた金で手に入れた土地だそうだが，今は植付されている面積よりは雑草の茂っている面積の方が多い位で，その中に野の花が赤や黄色の彩りをそえていた。丘をのぼったところに崩れかかった小屋があり，そのそばに馬が2頭遊んでいた。世話する者は誰も見当らないが誰かが農場と馬のめんどうをみているのだろう。

次に我々がおとずれたところはいわゆるヨクナパトウファ郡の東南の一角にある一部落を背景とした *The Hamlet* という作品の舞台となったところである。それは Snopes 一族が1900年頃ここに住みつき，次第に勢力をひろげ，ついにはこの村の権力者となって部落を支配する過程を描いている。Faulkner はこの「村」を手始めに *The Town*, 更にそれにつづく *The Mansion* のいわゆる三部作で，かの大作 *Absalom! Absalom!* にみられるのとやや類似したモチーフのもとに，古き南部の騎士道的美徳をふみにじって形振かまわずのしあがる狡猾な成り上り者の成功と破滅を取扱っているのだが，さきにも述べたように我々のおとずれたところは，いろいろの計略の後，Snopes 家の Flem Snopes が，これまでの村の権力者 Varner 家の末娘 Eula がよその土地からやってきた青年とねんごろになり，やがてこの青年が村から姿を消したかと思うと，彼女が妊娠しているという不祥事に目をつけ，彼は早速 Eula と結婚し，その代償に Varner から彼の屋敷を譲りうけることになったその屋敷である。その建物は今は全くの廃家と化してはいたが二階のベランダや手

写真(4)「村」の Snopes 家のモデルになった家の現状

のこんだ細工の中に往時を偲ばせるものが残っており，嘗ての Snopes 一族の栄枯の歴史をあたり一面を取囲んだ夏草があざわらっているかのようであった。このあたり一帯は森の開けたところに急に綿畠が広がっているといった光景で，民家は殆んど見当らず，思わず「過疎」という日本でも最近よく耳にする言葉が浮んでくる。バスに再び乗り込んでしばらく行き，典型的ともいえる南部のどいなかの店の近くで降される。日本の田舎でも最近は一寸お目にかかれないようなうらぶれた店だ。すぐ近くに嘗ては走っていた鉄道線路がレールもそのままに時の流れを物語りながら長々と横たわっている。それを横切って目を彼方にやれば，製材所がみえる。現在はあまり繁昌してはいないようだが，廃業してもいないらしい。自然に Faulkner の短篇 “Pantaloon in Black” が頭に浮んでくる。黒人の主人公 Rider は一生懸命に製材所で働き，白人と対等の取扱いを受けようと努力する。しかし如何にもがこうとも彼が白人

と対等のレベルに頭をもたげることは世間が許さない。そのくやしさに堪え切れず酒に手を出し，酔をかりて白人に乱暴をする。それを待っていたかの如く，保安官は彼を逮捕するばかりか，遂に白人のリンチによって彼は殺されるのだ。次にそのRiderという虐げられた黒人の押し殺した抵抗の迫力をフォークナーの作品の殆んどすべての黒人の登場人物を代表して紹介してみよう。

Then the trucks were rolling. The air pulsed with the rapid beating of the exhaust and the whine and clang of the saw, the trucks rolling one by one up to the skidway, he mounting the trucks in turn, to stand balanced on the load he freed, knocking the chocks out and casting loose the shackle chains and with his cant-hook squaring the sticks of cypress and gum and oak one by one to the incline and holding them until the next two men of his gang were ready to receive and guide them, until the discharge of each truck became one long rumbling roar punctuated by grunting shouts and, as the morning grew and the sweat came, chanted phrases of song tossed back and forth.

He did not sing with them. He rarely ever did, and this morning might have been no different from any other—himself man-height again above the heads which carefully refrained from looking at him, stripped to the waist now, the shirt removed and the overalls knotted about his hips by the suspender straps, his upper body bare except for the handkerchief about his neck and the cap clapped and clinging somehow over his right ear, the mounting sun sweat-glinted steel-blee on the midnight-colored bunch and slip of muscles until the whistle blew for noon and he said to the two men at the head of the skidway : "Look out. Git out de way,"

and rodd the log down the incline, balanced errect upon it in short rapid backward-running steps above the headlong thunder.

やがてトラックは轟音をたてて動いていた。大気は排気管のはやい鼓動と鋸のピューンピューンというかん高い金属音に鼓動し，トラックが一つ一つ荷おろし台に近づくと，彼は次々とトラックにとび移って，くさびを叩きはずし，丸太鎖をはずして彼がほどいた積荷の上で自分の身体のバランスをとりながら，鉤梃子でもって南部松やゴムの木やオークの木材を一本一本斜めの荷おろし台に向かってまっすぐに揃え，次の二人の組仲間がそれらの木材を受けとめ，しかるべく処理する用意ができるまで持ちこたえているのだったが，ついには，各トラックからの荷おろし作業は，うなるような叫び声と，陽が高くなるにつれて汗がにじみでる頃になると互いにかけ合う詠唱とによって時々区切られる一つの長く重々しいうなり声となった。彼はみんなと一緒に歌いはしなかった。今までもめったに歌ったことはなかったし，今朝も外の朝とちっとも変りはしなかったかも知れなかった——彼自身は，彼の方を見ないように注意深く気を配っている仲間の頭上に人間の背丈だけ高く立ち，今では腰まで裸になり，シャツはぬぎ，仕事着はズボン吊りで尻のまわりに縛りつけ，その上半身には，首のまわりに巻かれたハンケチと，ひょいと頭にのせられて，右の耳にすがりついているような恰好の帽子の外は何もなく，昇る太陽がその真夜中色の隆々たる筋肉の上ににじむ汗を鋼色にキラキラ光らせていると遂に正午を知らせる笛が鳴り，彼は荷おろし台のこちら側にいる二人の人夫に向かって，「気をつけろ。そこをよけるだ」と云うが早いか，斜めの荷おろし台を丸太にのって下り，その上で体をちゃんと伸ばしてバランスをとり，小走りにすばやくあとすだりをし，すさまじい轟音をとどろかせるのだった。　　—筆者訳

今はこの製材所には黒人らしい姿も見えなければ鋸の轟音も聞こえてはこなかった。Faulkner の全作品の舞台が殆んどこの Oxford を中心に——彼はこの Oxford を Jefferson といっているのだが——北はタラハチ川，南はヨクナパトーファ川にはさまれた狭い地域に限定されているので，ひょっとすると Rider が働いていた製材所のモデルもこの製材所かも知れぬ，と思ったりした。そういえば，このあたりでは黒人の姿をあまりみかけない。みんな南北戦争後北部へ北部へと自由を求めて移り住んだのだろう。そのことはさきにも言及した *Roots* の中にもそういう

情景は描かれていたのを思い出す。実際オックスフォードの町で黒人の姿をみかけた記憶はよびおこせないし，会議の参加者の中にも黒人は少なかった。この会議中三回にわたってパーティが催されたが，黒人の参加者のうちの誰もそれには出席しなかったのはどういうわけだろう。私はカリフォルニア大学バークレィ校から参加していた黒人の若い助教授と知合いになったが彼にこのことをたずねたく思ったが何となく憚られれた。法律上は解決されたとはいえ，人種問題はやはり Faulkner のいうようにまだ何百年，何千年を要する問題なのであろうか。

さて，ここで再び我々のバスにもどることにしよう。再び林の中をしばらく走ったバスは，ある橋の上で一時停車した。これがヨコナ川だという。Faulkner 作品の架空の Yoknapatawpha 郡の名の由来する川だ。この川は以前はヨクナパトーファ川と呼ばれていたそうだ。夏の樹木の生い茂る底を遠慮勝ちにその川は流れているといった感じの，その名の由来にしては以外に小さい川だった。

やがて我々はこのツアーの最後の目的地であるフォークナーの墓をたづねた。日本にも一度長野で行われたセミナーにやってきた彼，小柄なところが日本人に似ていることもあって何となく我々に親しみのもてるところがある彼は，1967年9月25日にこの世を去った。墓石は横に長いもので，あたりにかしわの木が二三本立っている，どちらかというとあまり目立たない場所であった。顔まで彫り込んである見上げるような立派な彼の先祖の墓石とは対照的であった。ところでアメリカではまだ○○家之墓というような方式はなく各個人個人の墓が立てられている状態で，このオックスフォードの小さな町でもそうだが，ニューヨークの墓地ともなると岡一面見渡す限り墓石や墓標で埋めつくされ，アメリカ広しといえどもやがて墓地と化してしまうだろう，と冗談まじりに語った Marge Mayer の言葉を思い出す。

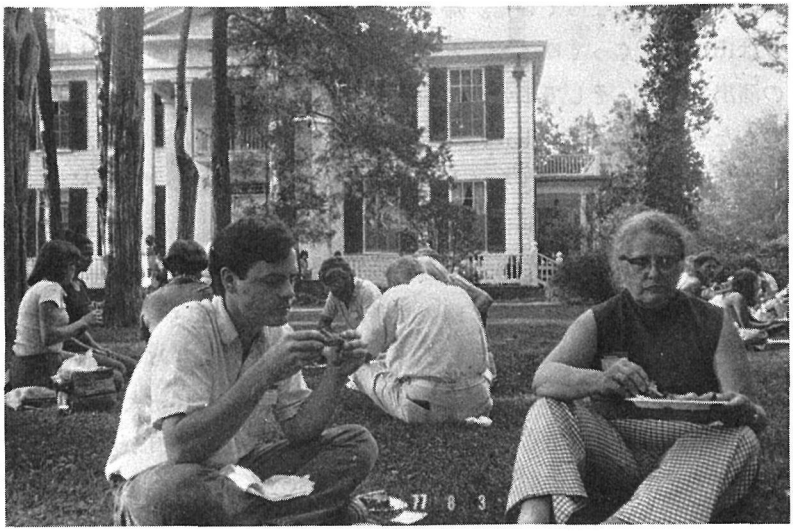
さてここで，この Faulkner Conference について少しのべてみよう。アメリカ中の一流のフォークナー学者や批評家が講師として招かれているということは先にも一寸触れたが，何よりも感銘を受けたのは，その

人達を招える主催者の配慮である。ミシシッピー大学では彼等の写真をウィンドウに飾り，その下にそれぞれの著書を並べている。こんなことは日本での私の経験ではお目にかかったことがない。講師に対する礼儀として，又その会を引立てる意味からもとても好印象だった。講師達はその暖い配慮に支えられてそれぞれの題目の下に熱心に講演し，参加者もそれに対してある者は賛成の，ある者は反対の意見をのべた。こちらが日本から来たからといって特別に話しかけるようにする講師はいなかったが，こちらから質問をすれば特にそのことを配慮して答えてくれる講師もいた。一般の参加者の中にははるばる日本から来たということを知っていろいろと親切にしてくれる人達がいてそのことがこの会議への参加に倍増のよろこびを与えてくれた。参加者の半数以上は女性だったろう。それも実にバラエティに富んだ年令構成である。やはり教職についている人が多かったが，大学の学生や，ただ Faulkner が好きで新聞の広告をみてやってきたという主婦もあった。一室には Faulkner に関する多くの記念すべき書籍や写真などが飾られ，一際かがやくノーベル賞のそばではクッキーとコーヒーがサービスされていた。ある一日はフォークナーの甥にあたり，彼そっくりの人物が故人の思い出話をして聴衆を笑わせ，又ある夜はフォークナーの孫娘——といってももう30代も後半かと思われたが——がフォークナーに関するいろいろの質問に答えた。最近フォークナーの愛人 Meta Carpenter によって書かれた *A Loving Gentleman*についてある女性が非難めいた質問をすると彼女は，“He is never, never a child.”と答えたものである。

明くる８月３日は Rowan Oak へのピクニックの日である。このローアンオークというのは Faulkner が長篇 *Sanctuary* の成功によってニューオルリーンズの金持から買取った屋敷だそうだが，ミシシッピー大学からさして遠くなく，このオックスフォードの住宅街のはずれにあり，Old Tailor Road という小径を入った右手にある。我々は’Welcome To Ole Miss’という看板のあるミシシッピー大学の正面入口の近くにある美術館のそばの広場に集合し，森の中の山道をたどって Rowan Oak

に向かうことになっていた。帰りは大学のバスが迎えにくるのだが，往きは山道をくぐってゆこう，というのは又何と心憎いばかりの主催者側の演出である。そしてこの道に沿うて木立が切れて青空が少しのぞかれるあたりの道端にFaulknerの *The Sound and Fury* を読んだ者にとっては忘れることのできないあのHoneysuckle「すいかずら」があった。*The Sound and Fury* については又後で触れるが，この白い花の匂いはまさにErosの匂いであり，あの奔放で情熱的なこの作品のヒロインCaddyの匂いであった。更に言えば煽情的ではあるがいつまでも魅きつけて止まないその匂いはまさにCaddyの象徴としてふさわしい。やがて間もなくRowan Oakに着く。今はこの家はミシシッピー大学がフォークナーの遺族から買取って管理しているのだそうだ。入口から見事な杉並木がアプロッチの両側に立ち，道を暗くしている。更に家の正面にも別の並木がある。フォークナーはこの家がとても気に入って死ぬまで住みつづけただけあって，建物こそ木造で古いものだが，外観の偉容はこの町にこれに匹敵するものは見当らないだろう。家の内部には又彼を記念する色々な品物が置かれ，祖先の肖像画などもかざられていた。彼の使っていた古いタイプライターやベッドは写真にもおさめてきた。又家の前庭の広さといったら。我々百人あまりがいくつもの円陣をつくってピクニックを楽しんだのだから——。又バックヤードには馬小屋とフォークナーが乗馬を楽しんだであろう原っぱがあり，その向うは小高い岡となってあたりには人家は一つも見えない。まあ譬えてみれば日本の封建諸侯の明治以後に建てた屋敷といった感じである。我々はきれいに刈込まれた芝生の上で木の間を渡ってくる心地よい涼風をあびて，多分この町のどこかの日本風に言えば仕出し屋から運ばれたチキン料理に舌鼓をうち，お国自慢に花を咲かせた。何人もの人達がそれぞれの州の自宅へ招待してくれたが，とてもそれに応ずることは暇がないのは残念だった。

Oxfordという町は実に美しい。初めミシシッピー州がアメリカ全州のうちで一番貧しい州だと聞かされていたのでかなりみすぼらしい町のたたずまいを想像していた。しかし大学の門を一歩外に出るや否や，そ



写真(5)　Rowan Oak でのピクニック

の予想は完全にくつがえされたのである。たしかに先にものべたようにずっと田舎へ行けばたしかにみすぼらしい店もあった。しかし町の中はSPLENDID！だとしか言い様がない。広い道路の両側には並木が植えられ，それに面した家までは又アプローチが延びてその両側は木立ちとなっている。だから玄関は道路からみればはるか奥まったところにあり，そこに立っている人の顔は定かにみえない位だ。一軒一軒の敷地はひろく，日本からみれば羨ましい限りだ。そして一般的に言ってこれらの家々は北部の家々よりも立派である。その理由は何故なのか，かっての南部貴族の名残りなのか，私にはこれは未だに解決されない問いである。町を散歩しながら私の足は自然に *The Sound and Fury* のモデルとされている家の方へ向かっていた。Faulkner の最大傑作ともいわれているこの作品はあらゆる小説のスタイルにいどんだ実にすばらしい金字塔である。胸をおどらせながらその次第に内部から崩壊していく南部の由緒ある家柄である Compson 家のモデルの家に近づく。南北に長い鉄の

柵にかこわれた広い敷地の奥に白い鉄筋の二階家が立っている。この鉄の柵こそ，白痴のBenjyが愛する姉Caddy——この女性についてはさきにHoneysuckleの話の時に触れた——の面影を求めて柵に沿ってうろつき，外を通る学校帰りの女の子をこわがらせた柵なのだ。しかし今は夏の昼下り，この道を通る女の子もいないし，勿論柵の中に人影はない。だがこの名門の一族の衰退の象徴ともいえる白痴Benjyとその女の子達との場面を次に引用してみよう。まさに読者をうならせるばかりのFaulkner Styleである。

It was open when I touched it, and I held to it in the twilight. I wasn't crying, and I tried to stop, watching the grils coming along in the twilight. I wasn't crying.

"There he is."

They stopped.

"He can't get out. He won't hurt anybody, anyway. Come on."

"I'm scared to. I'm scared. I'm going to cross the street."

"He can't get out."

I wasn't crying.

"Don't be a 'fraid cat. Come on."

They came on in the twilight. I wasn't crying, and I held to the gate. They came slow.

"I'm scared."

"He won't hurt you. I pass here every day. He just runs along the fence."

They came on. I opened the gate and they stopped, turning. I was trying to say, and I caught her, trying to say, and she screamed and I was trying to say and trying and the bright shapes began to stop and I tried to get out. I tried to get off of my face, but the bright shapes were going again. They were going up the hill to where it fell away and I tried to

cry. But when I breathed in, I couldn't breathe out again to cry, and I tried to keep from falling off the hill and I fell off the hill into the bright, whirling shapes.

私が柵にさわった時，それは開いていて，私はたそがれの中でそれにしがみついた。私は泣いてはいなかった。私はたそがれの中を女の子たちがこちらにやってくるのを眺めながら，そこに立止っていようとした。私は泣いてはいなかった。
「あそこに彼がいるわ」
彼女等は立止った。
「彼は出てこれないのよ。とに角何もしやしないわよ。さあ，いきましょう」
「私こわいわ。こわいわ。通りの向う側にいくわ」
「彼は出てこられないのよ」
私は泣いてはいなかった。
「こわがりっ子になっちゃ駄目。さあ，いきましょう」
彼女らはたそがれの中をやってきた。私は泣いてはいなかった。門にしがみついていた。彼女らはゆっくりやってきた。
「私こわいわ」
「彼は何もしないのよ。わたし毎日ここを通っているんだから。ただ柵に沿って走るだけなの」
彼女らはやってきた。私が門を開くと彼女らは立止まり向こうをむいた。私は何か言おうとし，彼女をつかまえ，何か言おうとした。すると彼女は悲鳴をあげた。私は何か言おう言おうと一生懸命だった。鮮明な形が目の前で止まり始め，私はその状態から抜け出そうとした。私はそれを顔の前から拂いのけようとしたが，その鮮明な形をしたものは再び動いていた。それらはその向うが急に落ちこんでいる岡へとのぼっていき，私は泣こうとするのだった。しかし私が息を吸いこんだ時，泣くために再び息を吐き出すことができなかった。私は岡から落ちまいとしたが，丘から明るいくるくるまわるものの中へ落ちこんでいった。
—筆者訳

後半はまさに現実から意識の世界へと移っていくBenjyの姿が哀れをさそう筆致で描かれていて痛々しいばかりである。しかし私はここで又現実へもどっていかねばならない。この家にはどんな人が住んでいるのだろう。思い切って中に入ってみることにした。円形の車寄せの砂利を踏みしめて玄関に近づいていくうちに車が外からもどってきた。怪しい

人間と思われては困ると思い，こちらから車に近づいていく。60才位の恰幅の良い人物が下りてきたので，この家の住人かとたずね，こちらがここにやってきた目的を話すと，今家を部分的に改造中なので内部を案内することはできないが，ということでそこで立話をする。丁度その家の一隅の高いところで一人の若者がペンキを塗っている。彼は大学生でアルバイト中なのだということだ。小学校の校長だというその人の言葉をそのまま紹介すれば，“He is moonlighting.” である。この言葉は人目をさけて働くということからきたらしい。ところでコンプソン家のモデルとなった一家の子孫は今はどうなっているかわからないそうだ。少くともこの土地にはいないとのこと。屋敷を囲む巨大な松の森だけが人の世の盛衰を見守ってきたのであろうか。

いよいよ会議も終りに近づいてきて，８月５日にはお別れパーティが催された。この一週間，レセプションを含めるとパーティは大小三回も行われたが，この８月５日のものが最も華やかだった。このパーティのために町の有志の一人が自分の家を開放してくれた。噴水と彫像を囲む大きな庭の処々にローソクが灯され，参加者は思い思いの Sunday dress に身を飾り，カクテルや料理のまわりに群がった人々は充実した一週間に名残りを惜しむかのように熱っぽく語り合い，夜の更けるのも忘れた。その中の一人妙齢の女性がかなり酔っぱらって私に三島由紀夫について話しかけてきた。今はそのくわしい内容は憶えていないが彼女はかなり三島の作品を読んでいるらしく，こちらは彼女の弁舌にいささかたじたじとなった。彼女について更によいことか，それとも悪いことかわからないが，パーティの終り頃には遂にダウンしてしまい，何人かの人に介抱される羽目となってしまった。となりの Lousiana 州からきていた大学生は小生に向かって “This is America.” といって笑った。アメリカの女性がみんなこのようだというわけではない。しかしこの種のパーティで日本女性が酔いつぶれることがあるだろうか，ふとそんなことを考えてみた。勿論私は善悪の問題で言っているのではない。かくしてパーティの余韻を残しつつも再び訪れる可能性も乏しいであろうオックスフ

ォードの町とミシシッピー大学を後にしたのである。キャンパスには名も知らぬ真赤な花が一面にあざやかに咲き誇っていた。

## 7．12年振りのDorn青年とMark Twain

8月6日私はセント・ルイス空港に降り立った。この空港のロビーには12年振りに会うDorn Schuffman 君が迎えにきている筈であった。さて今ここで一寸この青年について説明をしておかなければならない。Dornは昭和40年私が高校に勤めていた時，アメリカン・フィールド・サーヴィスの交換学生として日本で3ヶ月過したことがある。その時私は彼のtutorだった。当時まだ16才だった彼は今28才，大学院の博士課程を卒業しようとしているところ。数年前に結婚し，今赤ん坊が一人いる，というのが最近の連絡で知り得たことだった。

彼も私もすぐにrecognizeすることができた。彼は背はあまり伸びてはいなかったが，がっちりとした体格になっており，顔中髭を生やしていた。髭といえば，どういうわけかアメリカの若者で髭を生やしている者は随分多い。彼は大学院でギリシャ哲学を専攻したそうだが，その故もあってか彼の顔は髭のために益々philosophical にみえた。彼は又自分の父方の祖先はユダヤ人だといった。それを聞くと彼の顔はrabbiにもみえる。ちなみに母親はスエーデン系だそうである。

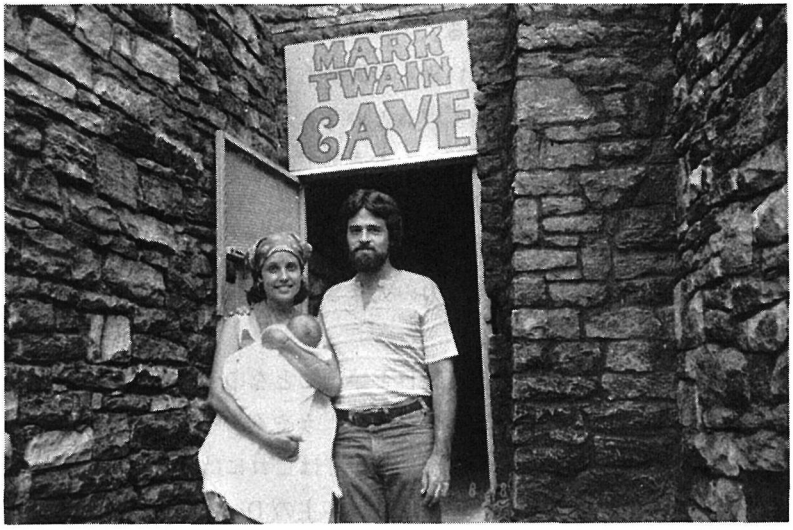
午後2時St. Louisを出発した彼の車ブルーバードはなだらかな起伏のフリーウェイを一路西へと向かった。彼の住所はセントルイスから車で約3時間Missouri州のColumbiaにある。Missouri 州は合衆国のほぼ中央に位し，日本の夏のようにむし暑い，と彼は言った。彼が日本に滞在中，私が‘sultry’という語をこの「むし暑い」という意味に使った時，アメリカでは‘humid’が普通で‘sultry’はイギリス英語だ，と言ったことなどを憶えていた。車中での会話である。車は時速90kから100k位でとばす。そして午後5時頃彼の家に着いた。彼の若い奥さんなるものは彼と同年齢で彼と同じUniversity of Missouri の出身であり，二人は大学の中で知り合ったそうだ。まだ生後3ヶ月の赤ん坊の名は，

あの箱舟で有名な Noah だった。彼は大学院の単位を全部修得したわけだが，まだ就職は決まらず，特に哲学となると大学教員になるポストは少ないらしかった。あと一年何とか食いつないで来年に期待しなければならないでしょう，と彼は言った。Jean という名の彼の wife は子供の生まれる前まで小学校に勤めていて，その時のたくわえがいくらかあるらしい。あとでわかったことだが，彼女の里はシカゴの相当な資産家であった。しかしこの若い夫婦はどうにか自分達で生活しようとしていた。その意味で生活はつつましやかだった。とはいってもアメリカの家は一般的に日本とは段違いである。貸家だという彼の家もセントラル冷房付きで，寝そべっても痛くない位厚みのある絨氈がトイレにまで敷きつめられ，部屋数もゆったりしたものだ。

その夜は Fair があるというので出かける。アマチュアの演奏会があり，各地区対抗のコンテストになっているらしい。又馬の品評会場もあり，若い女性が巧みに荒馬を乗りこなしたりしている。その他は子供のための遊戯場といったところ。ニューヨークなどと比べればこのあたりは実にのんびりした感じである。アメリカには日本の夏祭りや秋祭りのようなものはない。神社がないからお御輿もない。西洋人が日本の祭りに殊の外興味を示すのもうなずけるというものである。Dorn 君は日本に滞在中８ミリにこの日本の祭りをおさめていてそれを再び上映しながら，いろいろと新しい興味で問いかけ，最後に,「私のこれまでの人生で最も印象的なのは日本での経験でした」と語った。その言葉は外国での経験が人の心の中に刻みつける力の大きさを如実に物語っているように思われた。

あくる８月７日，この日は日曜日ということなのか，朝食と昼食が一緒の brunch というやつに12時になってようやくありつくことができた。毎朝規則正しく食事をしていた小生としてはこれにはいささかまいってしまった。それにこの brunch の準備は亭主の Dorn がする。奥さんは赤ん坊に乳をふくませながらのんびりしているようだ。それかといって彼女がすべて権力を握っているようでもない。Jean さんが勤めていて

Dorn 君が学生の頃，比較的自由な時間のとれる彼が，このようなことも身につけたのであろうか。午後はUniversity of Missouri を案内してもらい，夜は長い時間をかけて今度はJean さんがやいていたturkeyの丸焼きを御馳走になり，そのあとでミズリー大学のLucas教授のところへ出かける。彼はアジア研究の権威だそうで，東南アジア方面や台湾には二三度出かけたそうだが，日本はただその途中空港で乗り換えをしただけだということだった。まだ40才をあまりでていない若さで，木立の中に最近建てた山小屋風の感じのすばらしい家に住んでいた。Dorn君の話によると，日本円に換算して土地が350万円，建物が1,400万円位ということだった。しかし，日本ではとてもこんな家をその位の金額で手に入れることはできない。ついでながら，日本を最近訪れたことのある人々はみな日本は物価が高い，といっていた。高級ホテルや高級レストランは高いですよ，と言い返しはしたが，食料品と住居関係はたしかにアメリカは安かった。ドーン君は12年前日本の物価はとても安く感じ




**写真(6)　マーク・トウェイン洞窟とドーン夫妻**

られた，と付けくわえた。円高になればなる程日本の物価は外国人には高く感じられてくることだろう。

8月8日，いよいよマーク・トウェインの町 Hannibal へ出かけることになった。Columbia を出発した車は一面の畑の中を突走る。ある時間をおいて村の中心とおぼしき比較的人家の集まった場所を通りすぎる。Dorn 君が単調な景色でしょう，という。彼は日本での列車や車の窓からの眺めがとても楽しかったという。景色が刻一刻変るからだ。しかしこの刻一刻かわる景色に慣れている我々にはこの単調な景色が又新鮮にもおもえるのであった。途中で持参の弁当を誰もいないマーク・トウェイン博物館のそばの林の中の休憩所で食べる。この博物館も立派な建物でマーク・トウェインに関するありとあらゆる記念品が整然と陳列されていた。やがてそこを出た我々はいよいよ「トム・ソーヤーの冒険」の主人公トムの家に向かった。その家は勿論マーク・トウェイン自身の家なのだが，Hannibal の町のほぼ中央にあり，トムの初恋の女友達ベッキー・サッチャーの家と道路をはさんで向かい合っている。今では共に土産物店になっており，マーク・トウェンの小説に現われた場面や，それにゆかりのある殆んどすべてといってもいい品物が売られている。この町は「トム・ソーヤー」一色といった感じである。観光客も次々とやってくる。「トムの家」の二階からはあまり遠くないところにミシシッピー川が悠々と流れているのが見える。

さて我々はここでの最後の目的地である有名な洞窟へ出かけることにした。Dorn 一家も洞窟はまだ行ったことがないそうで，CAVE と書かれた標識をたよりにいくとしばらくして洞窟の前に着いた。この洞窟は *The Adventures of Tom Sawyer* の中で，ほかの子供たちとここへピクニックにきたトムとベッキーの二人が迷子になり，三日三晩閉じこめられ，いろいろと恐ろしい目にあう洞窟である。こうもりに出くわしたり，悪漢のインジャン・ジョーに襲われたりする。しかし最後には悪漢は餓死し，彼が洞窟内にかくしていた大金で二人は大金持となる，という痛快な話だ。なる程二人が迷子になる程これは迷路又迷路だ。今は

案内人が進むにつれて電燈がつくようになっており，あの小説の中のこの場面はここの描写だ，というように説明をする。しかし通路は非常に狭く，坂や曲りや枝道が多く，さぞかし昔は子供の冒険心をさそったことであろうと思われた。今の子供達はいずこも同じく遊び場を奪われたというべきだろうか。

夕方近くなって我々はもと来た道を引きかえした。3時間のドライブである。日は次第に暮れてゆきコロンビアに帰りついた時は午後9時をまわっていた。Dorn 君の家とも今夜でお別れである。明日は早くシカゴに発つことになっていた。Ernest Hemingway の故郷をたずねるために。

（つづく）